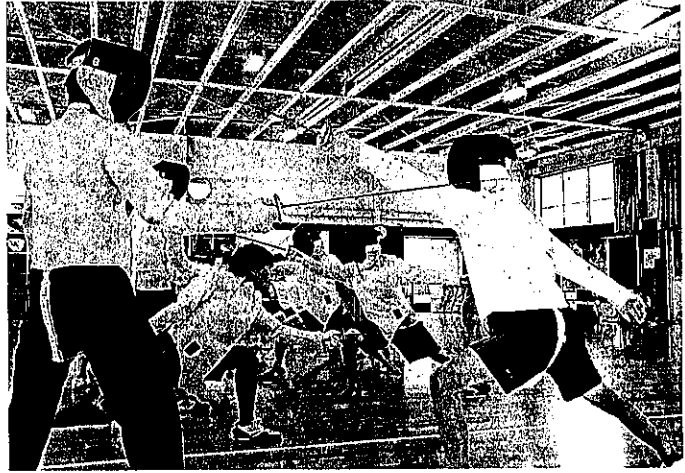


滋 賀

2人1組で機動作の連続する高校生たち
いづれ七六市園分の一県立山高校で



フェンシング 北京「銀」太田雄貴さんら輩出

すつきり ワイドに 地域面



マンツーマンで指導から攻撃姿勢を学ぶ小学生

3位に入賞するなど、競技歴2年以上の選手は世界大会に出場。愛荘町立愛知川東の太田さんに続き、小6年の荒木理生さん、県内から日本のトップ選手を輩出している。10日は平日は週4日、愛知高に通う。県選手選考を兼ねた荒木さんは高校選手と試合形式を行い、勝つこともあるという、全園制覇を目標に練習に励む。一方、高校から競技を始め始める人も多い。石山高2年の白井寛哉選手(16)は中学までは野球少年だったが、入学後の見学で興味を持ち、剣を握った。「場面に

頭脳と技「戦うチエス」

県協会、次世代育成へ

体育館の中に「カッツ、カッツ」という甲高い音が響き渡る。相手の体を狙って素早く繰り出される剣と、それを防ぐ剣が激しくぶつかる音が、相手の体を突くやむを得ない動作である。フェンシングは技の出る瞬間、カッツ、カッツと響き渡る。小西雅之「戦うチエス」とも呼ばれる。「小西雅之」

の表彰台となる銀メダルを獲得して以降、競技の知名度が上がってきているという。県立石山高3年だった10年の高校総体(サークル)で準優勝した木村勉乃選手(25)は「現下のフェンシングは、素早い攻撃や、接近戦での攻防と多彩な技が繰り広げられた。攻撃が決まり、「よし」とカッツポーズを見せる選手もいた。小中学生は合同練習以外の日は部活がある高校に通って練習して

か、突きや払いなどの基本動作を入念に確認した。小学生はマンツーマンで、剣の使い方や突く時の姿勢などを教わっていた。高校生は試合形式で練習を行い、遠い間合いからの素早い攻撃や、接近戦での攻防と多彩な技が繰り広げられた。攻撃が決まり、「よし」とカッツポーズを見せる選手もいた。小中学生は合同練習以外の日は部活がある高校に通って練習して



し、来年の自身の近畿大会に出場する。県協会の競技人口が少なく、大会では同じ顔合わせになることも多いという「も」とも話している。県フェンシング協会は、競技人口増加や6年後の地元での国民スポーツ大会(団体から改称)に向け、次世代の育成に力を入れている。畑中正道理事長(64)は「初心者でも、興味があればぜひ一度練習をのぞいてみては

http://www.shigafencing.com/」